



復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)

ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ行った

あらためて、主の復活おめでとうございます。復活の主日日中の福音朗読は「空の墓」の出来事です。いくらなんでも中田神父が今年の聖なる一週間を貫くテーマに選んだ「ラザロ、出てきなさい」「ほどいてやって、行かせなさい」これが通用しないだろうとお考えでしょう。実は私もそう思いますが、少し、匂わせる箇所はあるようです。

マグダラのマリアが朝早く墓に行くと、墓から石が取りのけてあるのを見ました。慌てて戻った彼女はシモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って告げます。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」(20・2)

それを聞いた二人の弟子は、外に出て墓へ行きました。「外に出て墓へ行った。」何かおかしいと思いませんか？「墓へ行った」だけで良いのではないのでしょうか。福音書が無駄なことを書いていないのであれば、「外に出て」は、「ラザロ、出てきなさい」の叫びを心で聞いたからではないのでしょうか。

すると、二人が墓へ行けば「ほどいてやって、行かせなさい」の声が待っているはずですが、実際には声は無く、墓の中に亜麻布が置いてあり、イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてありました。(20・7参照) いったいどこに、「ほどいてやって、行かせなさい」は隠されているのでしょうか。

私は、最後にそのヒントがあると思っています。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」(20・9) もし福音書が無駄なことを書かないのであれば、「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」(20・8) ここまでで十分でしょう。

彼ら二人は、きっとここで「ほどいてもらった」のです。互いに聖書の言葉を理解していないまま、聖書の言葉を背負い込んだまま、墓にやってきました。復活したらその場でお会いできるとか、声をかけてもらえとか、前もって考えていたことがあったのでしょうか。それは与えられませんでした。それでも、シモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子は、互いに相手が縛られていたものをほどいたので

す。

今、五感で感じられないけれども、イエスは確かに復活した。聖書の言葉は実現した。五感を頼るのではなく、聖書の言葉を頼りに、イエスの復活にたどり着いた。互いに、縛られていたものをほどいてみると、復活は五感を超える出来事だと気づいたのです。これは現代の私たちにとって幸いなことではないのでしょうか。

今年の四旬節黙想会に招いた説教師、個人的な面識はありませんでした。助任神父様たちはよく知っておられるようですが、本当に不思議

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

なめぐり合わせで招くことができました。聖書のゆるしの箇所を、ていねいに紐解いてくださり、私は見えないところで聞いておりましたが、まさにゆるしのテーマの疑問点を「ほどいてくださった」と思っています。

きっと、説教師は「ほどいてやって、行かせなさい」というイエス様の声に背中を押されて、私たちの黙想会に来てくれたのではないのでしょうか。これはまさに、五感に頼らずに、聖書の言葉を頼りに、イエスの復活にたどり着く。その予行練習だったのだと思います。

時代を超え、場所を超えて、今も復活したイエスは「ラザロ、出てきなさい」と叫び、そのあと、私たちのうち誰かを使って、「ほどいてやって、行かせなさい」を実践しておられるのです。

復活節第2主日(神のいつくしみの主日)(ヨハネ 20:19-31)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。